

深イ～話！

No.93

——潮「母への感謝」27年6月号より——

「湯は外へ外へとかくもんだ」

母は、七年前の平成二十年に亡くなった。

直腸癌ちよくちようがんを患い、人工肛門をつけていたが、元気に暮らしていた。ある日、急に腹痛を起こし入院した。

その時、実家を切り盛りしてくれている甥おいに「もう、アカン」と言ったそう。腸が癒着ゆちやくし、破裂したのだ。

私は連絡を受け、東京から飛んで帰った。幸い母はまだ意識があった。私の手を握ってわずかに瞼まぶたを動かしたが、安心したのか、間もなく静かに息を引き取った。八十三歳だった。

母の人生は決して平坦ではなかった。裕福な家で育ったが、母が嫁ぐ頃には没落していた。

舅しゅうとは政治に財産を注ぎ込み、多額の借金を作った。

父と二人でそれを返済しようと身体が曲がるほど働きに働いた。

最大の不幸は、逆縁ぎやくえんという運命だ。

三人の子どもに恵まれたが、長女を三十九歳、長男を四十九歳の若さで共に癌で亡くしたのだ。

残ったのは私だけだ。長男には子どもがなかったので、長女が残した二人の男子を自分の手で育て上げ、今、その内の一人が家を継いでいる。

私の記憶では、母はどんな時も泣いたことがない。本当に強い人だった。どんなことも「運命」として受け入れた。それは市井しせいの日本人の強さだった。

私は、判断に迷うと、今でも母の言葉を思い出す。

それは幼い頃、母と風呂に入った時に言われた言葉だ。昔は風呂が寒かった。私は早く温まろうと必死で手を動かし、湯を自分の方に取り込もうとした。それを見て母は「湯は外へ、外へとかくもんだ」と諭した。

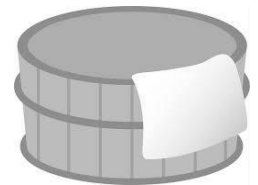
自分だけ温まろうと湯を取り込むと、脇の間から抜け出しまい、かえって温まらない。

反対に相手に温まってもらおうと湯を外へ外へとかけば、湯が循環して結果として

自分が温まる。

「人生も同じで、欲ばって自分だけ得をしようとしたら損をするぞ。

何事も相手に得をしてもらおうとしたほうが良いぞ」と母は言った。



この風呂での教えは、私の生き方に大きく影響している。私は、母の言葉通り、自分の利益を図るより、他人の利益を図ることを原則にしてきた。銀行員の時も、まず取引先の利益を優先した。上司から「たまには銀行の利益を考えろ」と叱られたことがある。しかし私は間違っていなかったと思っている。

金融も商売も人生も自分だけ利益を得ようと考えたら上手く行くはずがない。

母は、決して学問をした女性ではなかったが、地に足のついた本物の知識を持っていた。

そしてそれを私に与えてくれた。ありがとう、母さん。